

ワルシャワ散歩

ポ文協が創立したときから会員が希望していたポーランド訪問旅行が実現されました。九月五日の出発で十三人となる予定です。

ひと足早く、ワルシャワをご案内いたします。

※ ※ ※

ワルシャワの観光は、まず王宮とジグムント三世の円柱がある王宮広場から始めるのが一般的の様です。広場は、クラコフスキエ・プシエドミエシチェ通りの北端にあり、旧市街の入口でもあります。

旧市街 (STARE MIASTO)

第二次世界大戦で、この街は完全に破壊しつくされました。戦後ワルシャワ市民の不屈の力と愛情で見事に復元されました。とても戦後復興された建物だとは思えないほど、永い時の流れを経て静かにたたずんでいるかのように思えます。

ここには歴史博物館があり、ワルシャワの歴史、旧市街に関する資料が展示されています。また、大戦の

ドキュメンタリーフィルムが上映されています。

王宮 (ZAMEK KRÓLEWSKI)

一五九六年、古都クラコフのバベル城が破壊され、ルネサンス様式のワルシャワ城が正式の王宮となりました(ワルシャワに首都が移る)。

その後十七世紀中頃、スウェーデンに侵略され破壊されて、十八世紀に再建されました。ロシアに分割されていた時代は、ロシア皇帝を代表する侯爵の住まいになり、第二次世界大戦でまたも爆破されました。

一九七一年に復元工事が始まり、世界中のポーランド人の援助により一九七四年に外壁と屋根が完成、王宮の内部が再現されて、一般公開されるようになりました。

ジグムント三世の円柱 (KOLUMNA ZYGMUNTA)

ポーランドで一番古いモニュメント。一六四四年にブワジスワフ四世がクラコフからワルシャワに都を移した父親ジグムント三世に敬意を表すために建立しました。

高さ約三十メートルの大理石の柱

の上に王のブロンズ像が置かれています。昔は金メッキされていました。第二次世界大戦で破壊され、一九四九年に復元されました。

バルバカン (砦) (BARBAN)

旧市街で一番有名な建物バルバカンの形は中世期のヨーロッパでも珍しく、ゴシック後期の建物。十六世紀中頃、ベニスの建築家ジョン・バプチスがデザインしました。

聖ヨハネ大聖堂

(KATEDRA ŚW. JANA)

ワルシャワで宗教上の一番古い建築物。十四世紀末に建て始められ、最初は教区教会でしたが、一七九八年にカテドラルになりました。

一三三九年にポーランド・チュートン騎士団の平和会議、スタニスワフ・レシュチニスキ王とスタニスワフ・アウグスト・ポニアトフスキ王の戴冠式、五月三日憲法の宣誓式などが行われた歴史的な場所です。

この大聖堂の正面は、ポーランドらしいマゾフシエゴシック様式で、三身廊、星形の丸天井など、見所がたくさんある教会の一つです。

カジメジヨフスキ宮殿 (PALAC KAZIMIERZOWSKI)

ワルシャワ大学のキャンパスの中にあります。一六三四年ブワジスワフ四世のために建てられ、王の夏の憩いの場所として使われました。

オストログフスキ宮殿

(PALAC OSTROGSKICH)

十六世紀末に砦として使われていましたが、十七世紀末に宮殿として建て直されました。

一八五九年にバイオリニストのアポリナリ・コンツキが音楽院を開き、九十年以上にわたりシヨパン協会本部が置かれ、今日ではシヨパン・コンクール、コンサートといろいろなピアノリサイタルが開かれています。

※ ※ ※

ワルシャワで一番美しいといわれるウヤズゾーフ公園の中には、ウヤズドフスキ宮殿、ベルベデレ宮殿、ワジェンキ公園と宮殿、植物園などがあり、静かで木立の多いこのあたりは散歩に最適な場所です。

ワジェンキ宮殿 (WAZIENKI)

ワジェンキはポーランド語で「浴室」の意味で、ポーランド最後の王スタニスワフ・アウグスト・ポニア

トフスキが一七六六年から九五年にかけてこの公園にあった離宮に浴室を建てたので、この名がつけました。

ベルベデレ宮殿 (BELWEDER)

一八一八年から二二年にクビツキのデザインによって建てられました。「ベルベデレ」はラテン語で美しい眺めの意味。テラスから美しい風景を眺められます。一九一八年から大統領官邸として使用されていて、現在はワレサ大統領の住まいです。

(27号94年8月)



北海道ポーランド文化協会創立以来の懸案だったポーランド訪問が、やっと実現しました。

期間は一九九四年九月五日から十五日までの十一日間です。

訪問団に参加された十三名の方々は、ウツチの日本協会の方々との交流を第一の目的として、他にシヨパンゆかりの地やアウシュヴィッツをたずねるなど、忘れがたい感動の旅を体験されました。

例会としてすでに報告会は開かれましたが、全会員への報告として特集号を作りました。

(30号95年5月)

ポーランド感動の旅

— 訪問団参加者報告集 —



グダンスク
協会内の「連帯」コーナーで



ヴィエリチカ地底の塩の町で参加者全員

豪華な顔ぶれのツアー

小笠原 正明

今回の訪問の第一の目的は、ウツチの日本協会の方々とお会いすることでした。現地の吉田勝一さんのおかげで、なごやかで実りのある交流を行うことができました。手作りの食事を持ち寄ってのパーティーで、ポーランドの方々の真心が直接伝わってくるような雰囲気であったことをまずお伝えしたいと思います。

なお、私はポーランドで開かれた国際学会に参加する途中で、訪問団の方々と一時合流しただけなので、以下は知っている範囲あるいは聞いた範囲での感想です。

旅行そのものは大変「豪華」なものでした。円高とはいえ、航空機代を除いて十万と少しの旅行とは考えられないようなものでした。泊まったホテルはすべて超一流、昼食は訪問した土地の最高級レストラン、夕食は毎晩ヨーロッパ風の時間をかけたフルコース、移動はすべて貸し切りのバス（これには多少問題があったようですが）で、ガイド付き、有名な黒マリアの教会では祭壇のすぐ横に招かれるという歓待ぶりでした。しかし私にとっては、ツアーの参加

者の方がもっと豪華に感じられました。シヨパンの生家ではピアニストの方々から説明していただき、ウツチでは美術の専門家からアールヌーボーとは何かを教えてもらい、クラコフでは文学の専門家から有名な詩人の話や古書の話の聞きまし。また、ウツチから同行してくれた吉田勝一さんから、全体に非常に丁寧な説明をして貰いました。文化と芸術の国ポーランドを旅するのに、このくらい人材のそろったチームは無かったのではないのでしょうか。

ところで私は、十四年前の一九八〇年にポーランドにしばらく滞在した経験があります。当時、偶然にもウツチ工科大学のソリダールノシチ（連帯）に一番近い人々と生活を共にしました。生活はとても苦しく、ホテルフォオラムやホテルクラコビア（いずれも今回泊まったホテル）を利用するような人達とはかけ離れた貧乏生活を送ったものです。一度だけ、ワルシャワのホテルフォオラムに泊まりましたが、あまりの生活感覚の違いに倫理的な嫌悪感のようなものを感じて、一泊したあとは友達のを

ランド人のアパートにもぐり込んだ覚えがあります。ポーランドを離れるとき数名の友人から、「君は一番悪いときにこの国に来た、世の中が落ち着いたらぜひもう一度来てこの国

大きな歴史を持つ小さな町

栗原 朋友子

一九八二年、コルベ神父の映画「アウシュビッツ愛の奇跡」を私は見る機会を与えられました。「愛とは何か」「戦争と平和」について、それ以来考えるようになりました。

そして今回の北海道ポーランド文化協会の計画されたポーランド旅行に参加させていただき、ポーランド各地を廻ることができ、数々のおもいでが今もアルバムをみるたびによみがえります。その中でもコルベ神父の足跡をたどるかのような今回の旅は忘れることができません。

シヨパンの生家、ジェラソヴァ・ヴォーラを訪ねるためにワルシャワから西に向かってまっすぐ国道を訪問団を乗せたマイクロバスは走り、のどかな田園風景の中を四二キロ程行った時、国道を左に曲がり、一段と美しい秋のポプラの並木道に入りました。ポーランドの地図に地名も

を楽しんでくれ」と同じようなことを言われました。今回のツアーに参加して、あの人達の気持ちがあつたような気がします。

位置も載っていない小さい町ニエポカラノフ(NIEPOKALANOW)にきました。

このニエポカラノフはコルベ神父の作った「汚れなき聖母の町」でした。一九二七年、マクシミリアン・コルベ神父は、信仰誌「聖母の騎士」という雑誌を作っていました。その印刷所を兼ねた小さい修道院が、このニエポカラノフです。そして修道院長として命をうけてコルベ神父は働き、一九三〇年には日本に宣教のため来ております。長崎の大浦の天主堂での功績は、日本語で「聖母の騎士」第一号を発行したことです。その後、一九三九年九月、第二次世界大戦が勃発し、たちまち全ヨーロッパは戦火にまきこまれ、ナチス・ドイツ軍が我が物顔でポーランド中を荒し、コルベ神父は一九四一年、ゲシュタポ（秘密警察）によって逮捕され、

出版活動も停止されました。そして神父は、アウシュビッツ強制収容所に入れられ、若い人の身代わりとなつて、自ら、十名の受刑者の列に加わり、



第十一号の餓死室へ連れて行かれたそうです。

今回の旅でこの餓死室もみました。アウシュビッツ強制収容所を訪ねたとき、単に戦争の爪痕をみせるためではなく、アウシュビッツは愛と平和の大切さを教えるためにこそ残されたのだと思いました。数々の展示品を見た時、やりきれない気持ちになりました。コルベ神父は死を早める注射をされ息を引き取ったと案内してくれた方の説明に、石をのせられたように、心が重くなりました。

「大きな歴史を持つ小さな町」アウシュビッツを訪れ、十三年前に横浜で見た映画とどぶり、今もコルベ神父の生きざまに心うたれております。

今回の旅の最後の日、自由行動で主人と私はワルシャワ在住の友人の案内でルブリンにあるマイダネツク強制収容所を訪れる機会も与えられました。ここは、すべてが自然のままに残された博物館と言った方がいいほど、かつてあったままに保存されていて、アウシュビッツ強制収容所よりも、より深い感動を人間に与える場所だと思いました。人間の生命の尊厳がなによりも重んじられ、そして残酷で非人間的なことが二度とくりかえされてはならないと、二つの収容所を見学して思いました。

これらの収容所に眠る人々が地の底で、今もなお、そのことを訴えているように感じ、今回の旅は単なる観光旅行ではなく、多くのことを私に考えさせる良い旅でした。

この原稿を書き終わった直後、毎日新聞の「余録」欄で一人のポーランド人の死を知った。その人の名はフランシシェク・ガヨプニチェク。

ポーランド旅行での想い出

大和田 リえ子

今回、悩んだ末に決めた初めての海外旅行でしたが、こんなに一日一日が貴重で、且つ想い出に残る十二日間を過ごしたのは、生まれて初めてではないかと思いました。毎日がとても充実していて、感動したり、驚いたり、喜んだり、悲しんだり、単なる旅行に留まらず私にとっては大切な人生勉強になりました。

この楽しく、想い出深かった旅行の中から特に心に残っていることと考えると、全てが印象的でとても悩みますが、二つ程選んで書かせていただきます。

まず一つ目は、昔からポーランドと聞くと必ず憧れの気持ちで思い浮かべたシヨパン。その生家のあるジェ

この人こそコルベ神父によって生命を助けられた、かつての若い囚人であった。九十四歳の天寿を全うした。この人は当時「見知らぬ人が、私のために自ら進んで命をささげる、これは現実だろうか」と自問したという。この記事を読み、コルベ神父の愛と死の意義をあらためて感動のうちに覚えた。

ラゾヴァ・ヴォーラへ、念願かなって行った時のことです。ジェラゾヴァ・ヴォーラとは「鉄のような意志」という意味なのだそうですが、ワルシャワから南西へ五四キロ程行つた田園地帯にあります。バスで向かう途中、まわりにはリンゴやむこうでシリフキと呼ばれるプラムのような果物の木などがある、きれいな畑が一面に広がり、遠くへ目をやると山が全然なく、地平線がはっきりと見渡せることに驚きました。美しい景色を眺めながら、シヨパンもこのような風景を見ていたのだなあと、とても感慨深かったです。生家はしだれ柳のある池や、木々の生い茂る美しい森の中にあり、私達が訪ねた

時もたくさんの人々が訪れていました。シヨパンの生家がこのような静かで落ち着いた美しい場所にあり、シヨパンを愛する人達が多く訪ねて来ることをとてもうれしく思いました。

中にありますが、まわりの空気に暖かさはなく、ピンと張りつめたような冷たさを感じました。収容所の中には、あの忌まわしい事実を一人でも多くの人々に伝える為、ここへ連れて来られた人々のたくさんの写真が壁に並び、彼らの靴や靴墨、眼鏡や義足、櫛や鞆、そしてここへ来た時に刈られた信じられない程の量の髪の毛が、山のように保存されていました。鞆にはいろいろな住所や名



ジェラゾヴァ・ヴォーラのシヨパンの生家で

前が書いてあり、あちこちから連れて来られたのがわかりました。私は大分昔に『アンネの日記』を読みましたが、まだその時はユダヤ人に対する想像もつかないような仕打ちを、よく理解できませんでした。そして今回アウシュビッツを実際に訪れ、自分の目で恐ろしく、痛ましい光景を見て帰って来たら、もう一度あの本を読み返してみました。読みながら本に出てくる悲しく残酷な様子が、アウシュビッツで受けた大きな衝撃と重なり、胸がしめつけられるような思いでした。日記の中にアンネの言葉で「戦争が何の役にたつのだろう? 何故人間は仲良く平和に暮らせないのだろうか?」と書かれています。私もアウシュビッツ収容所を訪れて、切実にそう思いました。今でも世界のあちこちで争いが絶えないこの世の中を、とても悲しく思っています。そして今回実際に自分の目で見て、本やテレビで知ったつもりでいた知識より、遥かに真実を知ることができたと思いますので、一人でも多くの人にアウシュビッツを訪れてほしいです。そして世界の人々が民族、人種、宗教を超えて人生について、平和について、戦争について深く考え、そこで人々が受けた苦しみを、二度と他の人々に繰り返さ

せないようにするならば、悲しい運命に散った数多くの声なき犠牲者の霊も慰められるでしょう。最後に嬉しかったこと、驚いたことなど少し付け加えると、一つ、とても安い旅費で済んだのに、宿泊したホテルは四ツ星以上で立派だったこと。食事はとてもおいしく、昼と夜はコース並だったこと。私は乳製品が大好きなのですが、ポーランドでは牛乳やヨーグルトは期待できないだろうと思っていたら、とってもおいしかったこと。ポーランドの犬は、散歩の時も首輪をつけられている犬など全くなく、きちんとしつけされていて、日本の犬とは比べものにならないこと。どんなに貧乏そうな家でも、必ず窓際にお花を飾っていたこと。そしてウツチでの交歓会で特に思ったのですが、ポーランドの人々はとても心優しく、気持の暖かいことな

どです。

本当にポーランドへ行けて良かったです。また機会があったら、ポーランドを訪れたいと思っています。今回のポーランド訪問団を計画し、御尽力下さった方々には、この紙面をおかりして心から御礼を申し上げます。たいと思えます。どうもありがとうございます。

ポーランドの旅を終えて

米光幸子

一九九四年の春迄、札幌に住んでいた私は、幸いにもクリスマスチャンセントリーの近くだったので、ハリーナ先生のポーランド語講習を受ける機会に恵まれました。なかなかモノにならないながらも、先生やポーランドを訪れる機会の有る方々の御話を耳にして、段々と憧れの気持ちが大きくなって行くのを禁じ得ませんでした。一寸だけピアノを習った身でショパンは大好きな作曲家、そのポーランドのワルシャワは嫁の出身地ですから尚更のことでした。いつか北ポ協会で訪問の機会を作って下さると期待しておりましたが、主人の定年に伴い岡山に移り、それでも懐かしい北海道の皆様と旅が出来ることを心待ちにしていたのでした。

ポーランド語講習を受けた第一の目的、息子達の結婚式でポーランド語で交流出来ることが実現した後、第二の目的も又実現することを疑わず待っていた甲斐があり旅行に参加した時、心の奥底にあったものは観光気分というよりも、あの広島を訪れた時に感じた一種の巡礼的な贖罪

的なアウシュビッツをこの目で見て、反省したい様なそんな気持ちだったと思います。人間の神を畏れぬ愚かな行為は今後も後を絶つことが無く、世界中で、この日本でも起こっていることを考えると、本当にいたたまれぬ思いです。過去に有ったことを伝えてゆく事の大切さをつくづく思い出された旅でもありました。

街角に残る、ポーランドの人々がここで何人ナチスに処刑されたというような碑も、ゲットトの跡も、黄金の秋の抜けるような青空と明るい人々と対照的に、この国の人々の永い苦難の歴史を思い起こさせるものでした。

最近当地の新聞の記事で、広島県福山市に「ホロコースト記念館」が出来たことを知り、意を得たように感じたのは私だけではないと思います。アンネ・フランクの父との出会いから始まって証言や資料を集め、今では二十数カ国の五百点を超す資料が得られ、開館記念式が六月十八日に行われるとのこと、聖イェス教会の一牧師の努力の結晶です。アン

ネの友人リース・ピックさん、ホロコースト研究の権威、米国ニューヨーク市立大のランドルフ・プラハム名誉教授などの記念講演と共に、七月一日からの一般公開では、ノーベル平和賞作家、エリー・ウイーゼル氏や「シンドラーのリスト」に載っている人からの手紙、ナチスの強制収容所で書かれたユダヤ人の詩や遺品、写真などが展示される予定です。これは日本で初めてのことなのだそうです。

さてポーランドへの旅は、もう一つの反省の旅ともなりました。如何に私が物質文明におかされているかという事をつくづく感じたのです。例えば素朴なりんごの味にハッと思ったのでした。今年の大震災で多くの日本人には同じ思いを感じた方も少なからずいらした事とと思いました。ワジェンキ公園の印象的なショパン像と、その足元でのピアノ演奏を聴いたこと、ヤスナグラの文字通り輝く夕陽と教会のミサ、ザコパネの古い教会や露天市場、スターレ・ミヤストの建物や広場、交流会での出会い、何もかも素晴らしい経験でした。又、素晴らしい方々との出会いの旅でもあり、あの時のメンバーの方々と交流の機会があるということ、

出来れば参加させていたいただきたいと思っている所です。四月二十九日の当地の新聞記事にそのお一人の方のお名前を発見、御紹介させていただきます……赤磐郡赤坂町はユニークな「絵本によるまちづくり」を進めている町ですが、読書公園の開設一周年記念に、園内のアトリエで個展を開いた。豊かな子ども心を育てようというのが目的で、「文化には値段はつけられない」と入場料無料。国連のユニセフ賞も受賞したスロバキアの挿絵画家、ドウシャン・カライさんを紹介したのが町委嘱の「絵本の大使」で東欧の芸術に詳しい森ヒロコ・スタシス美術館の長谷川洋行館長である、という記事です。旅行中、バスの中で、ホテルの食堂で傾けて下さった数々のウンチクを思い出しているところです。「不思議の国のアリス」の絵本原画など二百二十点を是非見に行きたいと計画中です。すべての子供が豊かな心をもって……育つよう、ホロコーストなど二度と、起きない世の中になるよう祈りながら……。

シヨパンの巢

三 浦 洋

ポーランドの旅から瞬く間に半年が過ぎましたが、楽しかった思い出は鮮やかさを増すばかりです。こうして机に向かっている間、シヨパンの生家があるジェラゾヴァ・ヴォーラへ向かう途中に眺めた田園風景が目の前に浮かんできます。ワルシャワ郊外に出ると、辺りはたちまち地平線が見えるほどの平野になります。そこにはただ畦道だけが、ミツキエヴィチが「リボンのように」と形容した様子で、緑と茶色にいろいろられた畑を十字に走っていました。

こんなふうに旅の思い出を書き出すと、いくらページがあっても足りませんので、ここではワルシャワでシヨパンゆかりの場所を訪ねた体験の極一部だけを記すことにします。シヨパン・ファンなら、ワルシャワの「クラコフスキエ・プシエドミエシチエ通り」の名前を覚えておかれた方がよいでしょう。この舌をかみそうな名前の通りこそ、シヨパンが生後七カ月ほどから二十歳までを過ごし、人間形成をとげた故郷の懐に他ならないからです。

旧市街（スターレ・ミヤスト）の入り口にあるジグムント王柱から聖十字架教会までの約一キロメートルの界隈が、クラコフスキエ・プシエドミエシチエ通りです。今回、実際に踏査してみても、この一キロメートルを直径とする円内にシヨパンに係のある建物のほとんどが入ることに気づきました。シヨパン一家が住んだ三軒の家（そのうち、サスキ公園にあった最初の家は今はない）をはじめ、八歳のシヨパンがデヴュー・コンサートを開いた場所や、シヨパンがよく行っていた喫茶店などがこの円内に収まるのです。ちなみに、二軒目の家はワルシャワ大学のアジア研究所の棟になっていますし、三軒目の家は美術大学の建物です。この二つの建物と、シヨパンの心臓だけが帰ってきた聖十字架教会とは、まさに「向こう三軒両隣」の位置関係にあります。

このクラコフスキエ・プシエドミエシチエ通りの界隈は、十九世紀の詩人ノルヴィットが「シヨパンのピアノ」という作品の中で、シヨパンに呼びかける形で「君の巢（ゲニヤズド）」と表現した場所です（残念ながら、ノルヴィットの作品の邦訳はありません）。私にとって、シヨパンの「巢」を自分の足で訪ね、この界隈の空気を肌で感じ、この界隈の人々の表情をつぶさに見ることができたことは、無上の喜びでした。おまけに、旧市街で開かれていた青空古本市、といっても、小さな棚に古本が無造作に並べられていただけですが、そこで私はノルヴィット作品集のポーランド語版を見つけたのでした。首都ワルシャワの雑踏のただ中で、眠っていた宝物を見つけたような気持ちでした。

宝物と言えば、帰国する前夜に聴きに行った小さなピアノ・コンサートは、生涯忘れ得ない私の宝物のような体験になりました。会場は旧市街の一角にある歴史博物館の三階です。新聞には「夜七時開演」と出ていたので夕食後あわてて市街電車に飛び乗りましたが、行ってみると八時からでした（！）。歴史博物館の企画だからなのか、ポーランド音楽の歴史を時代順にたどるシリーズ・コンサートの一つで、たまたま当夜のプログラムは「シヨパン以前の音楽」と題されていました。女性らしい夢見るような旋律が続くマリア・シマノフスカの作品や、「ポロネーズの王」と呼ばれるオギンスキの哀切な曲が胸にしみました。とくに、「祖国よ、さらば」の名で知られるポロネーズの美しさをあらためて感じました。ワイダの映画「灰とダイヤモンド」のラストで悲しげに鳴り響く曲です。また、シヨパンの師の一人であるエルスナーの作品を生演奏で聴く機会には、これが最初で最後ではないかと思われました。モーツァルトの美しい旋律だけを集めて歌うようなエルスナーのソナタに接したとき、「歌う心」こそ、シヨパンがこの師から学んだ最大のものだと確信しました。演奏したのは、マリア・コレツカ・シヨシュコフスカという中年の女性ピアノ奏者です。もちろん、演奏後すぐにサインをもらいに行きました。なんと素晴らしいピアノリストが知られないでいるのだろうか、と思いました。

私はさらにシヨパンの「巢」を歩きながら感慨に耽りました。ああ、あれが、シヨパンが終生持っていたアルバムの表紙に描かれていたジグムント王柱だ……あの建物の四階がシヨパンの部屋で、二曲の協奏曲をはじめ、ポーランド時代の彼の珠玉の作品がここで生まれたのだ……。この建物に住んでいたとき、シヨパンの妹エミリアが結核で、わずか十四

歳で亡くなったのだ……。百六十四年前の秋、シヨパンが旅発った街角に立った私は、とめどなく天才の生涯を追想しました。

聖十字架教会に入って左のところにシヨパンの心臓が埋められた記念柱があり、シヨパン像の顔は旧市街の方を向いています。青春の日、彼が愛したクラコフスキエ・プシエドミエシチエ通りの風景を、今も彼はここから見ているでしょう。「心があるところに、宝もある」。シヨパン記念柱に刻まれたマタイ福音書の

塩の来た道

— ヴィエリチカの伝説より —

栗原成郎

ヴィエリチカの岩塩坑見学は今回の旅行日程のなかで唯一のオプショナル・コースであったが、一見の価値ありということで、全員参加することになった(費用は一人十七ドル)。クラクフ滞在中の、オシフィエンチムを訪ねた日の夕方に組まれた日程で、いささか強行軍の感はあったが、全行程専用マイクロバスで移動という便利さのおかげで、短い時間を無駄なく使うことができ、楽しい見学

一節は、ポーランド人の篤い信仰心とエスプリが結晶した美しい碑銘になっっています。シヨパンの心が、彼の宝である祖国に今あるという意味でもふさわしい句ですし、ポーランドの宝であるシヨパンの心がそこにあるという意味でもふさわしい句でしょう。そして、地球の裏側に住む私の宝も、今ではクラコフスキエ・プシエドミエシチエ通りにあります。これからずっと、私の心がシヨパンの「巢」を離れようとしなからず。

旅行となった。

ヴィエリチカはクラクフの南東十三キロの地点にある人口約一万八千の町で、現在はクラクフの「ベッド・タウン」と化しているが、ヨーロッパ有数の岩塩の採掘場として知られている。この岩塩は十三世紀の末から本格的に採掘されはじめ、いまはほとんど掘り尽くされている。塩の採掘と販売は王の管理のもとにおかれ、塩は王室財源の三分の一を

占めた。中世クラクフの繁栄を支えていたのはヴィエリチカの製塩業であつた。

坑道は、長さは全部合わせると二百キロにおよび、探さは三三七メートルで九層から成る。上部三層の採掘跡は地下博物館となっていて、一般に公開されている。

私たちを案内してくれた博物館の係員は、三十年坑夫として働いたというベテランで、端正な顔立ちの小柄の老人だつた。岩塩坑のことならなんでも知っているという感じで、説明も簡にして要を得ており、こちらの質問にも的確に答えてくれた。

ベテラン坑夫の説明のなかにはヴィエリチカの塩にまつわる伝説が含まれていて、私の興味をひいた。それをここに紹介する。

一、キング女王の持参金

中世のある時期までポーランド人は、食卓につく時はいつも悲しげな顔をして、料理が味足らずなのを嘆いていた。ポーランド人は塩というものを知らなかつたのである。

十三世紀のこと、ポーランドのボレスワフ王は、ハンガリー王ペーラ四世には敬虔で美しい娘がいることを知って、求婚のため二人の使節を派遣した。ハンガリー王は娘のキン

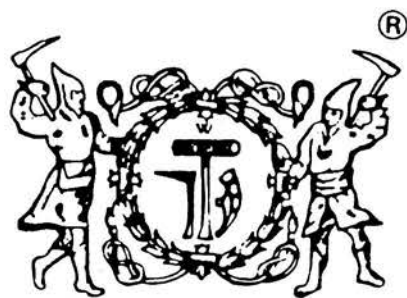
ガ姫をポーランド王に嫁がせることにした。キング姫は、ポーランドには塩がないということを知って、ポーランドに塩を贈りたいと思い、持参金の一部として塩を加えてほしい、と父王に願った。ペーラ四世はハンガリー領マラーマロシユの岩塩坑を娘の持参金目録に加えた。キング姫は靈感が働く人であつた。姫はその岩塩坑に赴き、「ポーランド王との婚約のしるしとして」指から指輪をはずして縦坑の底に投げこんだ。

ハンガリー女王の嫁入りの行列はクラクフをめざして出発した。結婚式が終わり、ポーランド王妃となつたキングはすぐに靈感に導かれて、王と随員を伴って、クラクフ近郊の寒村ヴィエリチカに赴いた。

王妃の命にしたがつて村人が地を



キング王妃による岩塩坑の発見



二、スカルプニツクの話

ポーランド語の skarbnik (スカルプニツク) はふつう「会計係」、「金庫番」の意味であるが、民間伝承では地下の埋蔵資源の守護神のことであり、ネズミや白い長いひげの小人の姿をとって坑夫たちの前に現れる。

昔、アンテックという名の若い坑夫がひと仕事終えて休憩し、弁当のパンとチーズを食べていると、小さな灰色のネズミが彼の足元に現れた。ネズミが人を恐れる様子もないのを見て、アンテックがパンのかげらを差し出すと、ネズミは彼の手からそれを食べた。すると、驚いたことに、

ネズミは小人に変わった。小人は食べ物のお礼を述べ、坑夫に、もし稼いだ金の半分をくれるなら、仕事を手伝ってやる、と言った。アンテックは、相手がスカルプニツクだ、とすぐに分かり、小人の条件を受け入れた。小人はただちに坑夫をとある

廃坑へと案内した。廃坑の奥には純粹な塩の結晶の岩壁があった。坑夫が驚いている間に小人の姿は消えていた。なん日もの間、アンテックはせつせつと岩を掘りつづけた。仲間

の坑夫たちは羨望の目でアンテックを見た。坑夫の多くはアンテックよりもはるかに経験を積んだ者たちであ

ったが、このように大きな塩の岩棚を発見する幸運に恵まれた者はいなかった。坑夫たちのなかには、アンテックが悪魔と取り引きをしている、と陰口をたたく者もいた。しかし若い坑夫は誹謗や中傷を物ともせず、唇をかみしめて一心不乱に働いた。そしてネズミがそばに現れるたびにネズミに弁当を分け与えた。一週間が過ぎ、若い坑夫はその働きに応じた巨額な賃金を受け取った。坑夫たちは居酒屋に飲みに出かけたが、彼はその仲間に加わらなかつた。彼は仲間が全部帰っていくのを見とどけて、自分の坑に引き返した。

スカルプニツクはそこで待つていた。彼らは金を山分けにしはじめたが、硬貨の数が奇数であることが分

ポーランドの旅行の思い出

藤 平 隆

一、ポーランドへの恋

学生時代の二年の時か、三年の時か定かでないが、ポーランド映画に出会った。この頃よく映画を観ていたが、この出会いが、どうして起こったのかもよく思い出せない。最初の映画は「灰とダイヤモンド」だったと想う。いや「夜行列車」だったかもしれない。その後も「地下水道」

があった。アンテックは半端になった最後の一枚の硬貨をスカルプニツクに与えた。小人はアンテックを見てにっこりと笑い、以前にもたくさん坑夫たちを試してみたが、最後に残った硬貨の一枚をほしがらなかつた人間はアンテックが初めてだ、と話した。そしてスカルプニツクは若者に金を全部与え、家に持ち帰って有益に使うようにいった。スカルプニツクはアンテックに、困ったことがあればいつでも助ける、と約束した。アンテックは自分の家を建てて、美しい妻を娶った。彼は大金持ちになったにもかかわらず、岩塩坑で働きつづけ、貧しい人々をいつも助けたという。

や「影」、「尼僧ヨアンナ」など意欲的に観たものだ。これらのどの映画からも新鮮で強烈な印象を受けたものだ。映画だけでなく、小説への世界へも興味をそそられて「現代東欧文学全集」(恒文社)のポーランドの六、七、八巻などを読んだり、歴史書を読んだりして、ポーランド映画に魅せられただけでなく、ポーラン

ドそのものに熱い恋心を抱くはめになつたのであった。

そんな時代から、すでに三〇年余りの歳月が流れたが、その恋心に起伏はあつたものの、冷めることなく現在まで保たれてきたのである。こんなことだから、ことあるごとにポーランドのことを語るの、「藤平はなんであんなにまでポーランドに関心があるのか」と不思議がられる存在(?)にまでなつてしまった。そんなことを聞かれると、学生時代の映画の話からはじまつて、どうしてポーランドか、と長々と説明をはじめたのだつた。

二、北海道ポーランド文化協会との出会い

田舎の池田から札幌へ出て来ても、スナックや居酒屋でもポーランドについて話すものだから、そのうちに北海道ポーランド文化協会の一会員と会う機会に恵まれ、即座に入会することができた。そして、ポーランド行きが実現することになった。夢にまでみたポーランド旅行で、強く印象に残つた一部を以下手短かに記すことにしたい。

三、ワルシャワ蜂起記念碑・一輪のバラ

ナチス・ドイツに対するポーランド人の誇りをかけた絶望的なワルシャワ蜂起を記念する一群の彫刻の中に、兵士が小さな子どもを小脇に抱えて前進しようとしている像がある。その子どもと横の兵士との間の狭い空間を利用して、一輪のバラがさし込むようにして献ぜられていた……。

四、ニエポカラノフの修道院

アウシュヴィッツでの餓死の刑を宣告された一青年の身代わりとなつて獄死したコルベ神父を記念する博物館(教会)を訪れた。ガス室による大量殺りくと餓死の刑のアンバランスさには不思議な思いがする。コルベ神父は長崎で宣教していたことがあつて、その当時の日本の生活用具などが多数展示されていた。

五、すばらしきポーランド女性

帯広と札幌に來たことのあるヒエロフスカ・クリスチーナさんに会うことができた。帯広の個展の会場で会つて、短い時間だったが、池田などを案内することができた。私が初めて直接会話をすることが出来たポーランド人だ。彼女はエッチング作家で、「ポロニカ」創刊号でも彼女の作品が紹介されていた。今後活躍

を期待される有望作家なのだろう。

世界的に著名なチェンバリストのエリザベータ・ステファンスカさんにも会うことができた。数カ月後の十一月に池田町田園ホールで彼女のコンサートを開催することになっていたの、その話をしていると大竹貞さんが、「良く知っているの、行ってみましょう」ということになつて、お会いすることができたのだつた。通訳の吉田さんを介して楽しい会話の時間をもつた後、再会を約してお別れした。池田で再会した時のことはまた別の機会です。

小林暁子さんの友人のカーシャさんにもアンバーの買物や観光案内をしていただいて、ポーランドでの思い出を豊かなものにしていただいた。同じ名だが通訳のカーシャさんも理知的な女性で、私たちの旅行を一段と内容豊かなものにしてくれた。

六、オペラ劇場と文化科学宮殿

ウツチで短時間であつたが、オペラ劇場の内部を見ることができた。分厚い板と無造作に補修されたステージ、それに奈落のように深いオーケストラピット、一千名以上収容できる固定席。オペラを観たかったが、シーズン前で不可能。あのワルシャワの悪名高きスターリンからの贈り

もの、文化科学宮殿の奥深くにある小劇場で長谷川洋行さんの友人で、ポーランドのスーパースターであるスタシスさんの自作自演の演劇を鑑賞する機会に恵まれた。彼のこれまでの半生を演劇化したものだという。直前の席でスタシスさんの母親役をした女性が「ポーランド語は?」ではフランス語は?と気づかなくて来た。どちらもだめなので会話は出来なかつたが、楽しい雰囲気を楽しむだけで充分だつた。

七、グダンスクへの一人旅

ザコバネからチェンストホーバへ向かう途中、クラコフ空港で一行と別れてグダンスクへと飛んだ。ポーランドへの熱を再燃させた「連帯」の発祥の地を是非みてみたいと思つたので。

旧レーニン造船所や連帯のメンバーで闘いの過程で倒れた牧師や活動家をまつる教会にも行くことができた。

ドイツ人の手によってつくられたこの街ダンツイヒは、復旧された旧市街にその特徴が良く現れていて、直線的な街並みが印象的だつた。ソポトは小雨に煙っていたが、すばらしいロケーションだつた。市内の運河も……。

私とカーシャのグダンスク

小林 暁子

訪問団の他のメンバーが帰国の途につく九月十四日の早朝、私はワルシャワに住む友人カーシャと共にノンストップの特急列車でグダンスクに発った。汽車はコンパートメントの一等車で、乗客の姿は一等車にはほとんど見られなかった。駅で朝食用のサンドイッチを買ったが、汽車は朝食つきだった。

カーシャは彼女の絵本出版の直前で多忙な中を、私のために二日の休暇をもらって同行してくれたのだ。私は彼女への感謝の気持ちをこめて、海の見える素敵なホテルに泊まることにしようと思心に決めていた。

グダンスクの駅に下りて、さて案内所はないかと広場へ歩き出したところへ、長いコートを着て半白の髭をひつつめにし、ぶ厚い眼鏡をかけたやせた中年の女性がカーシャに話しかけてきた。カーシャは何か断り、私たちは歩き出したが、その女性はおもついで早口で一生懸命話してくる。カーシャは困ったように「自分の家に一泊千円で泊まらないか」といっている」という。その女性の

雰囲気から、行き先は余り良いところではない、という感じがして、私は「ホテルに泊まりたい」といった。

その女性はなお行く手をふさいで、「部屋も清潔だしシャワーもお風呂もついている」という。こんどはカーシャまでが「この人は悪い人じゃないさそうだし、値段もまあまあだ。どかが気に入らないの」というので、道端でさそわれたことや、千円という値段が安すぎて心配、などとは言えず、見てから返事をすることにしてタクシーでその家に行った。

着いてみると思っていたよりずっと貧しい感じのブロック二階建てのアパートで、家の前には低い垣根が続いており、玄関の前には一戸ごとに小さな木戸がついていた。

その女性は二階に住み、一階の二部屋と台所兼食堂と浴室を旅行者に貸して、年金生活の足しにしているということだった。

部屋の中は殺風景で、ベッドが二つ、ビニールクロスをかけた円いテーブル、椅子二つ、古い洋服ダンスと、何も入っていない戸棚、その上の一

輪ざしには赤いホンコンフラワー。部屋の片隅にあるタイル貼りの背の高いストーブだけが少し興味をひいた。

食堂は寝室より二まわり程小さく、小ざっぱりしていた。となりのもう一つの部屋にはドイツ人の女性が入っているということだった。

気になっていた浴室を見た時、ああ、これはダメだと思った。穴蔵のような小さな部屋に大きな浴槽とトイレ。それらは一生懸命磨いているらしかったが、金具もタイルも古い古いもので、水の出も悪かった。

断る言葉を探して「トイレが」「水が」といいかけたが、真剣に見つめる女性の目に、悪い返事は出来なかった。「これはポーランドの、貧しいけれど普通の家よ。それにここはほんとに寝るだけ」というカーシャの言葉で私はここに泊まることに決めた。

その女性の嬉しそうな顔と、すぐ持ってきた古いけれど洗濯したてのシーツを見て、ここに泊まらずにきれいなホテルに行つてし

まったら、ポーランドの人々の普通の生活を知らずに終わってしまうところだった。日本を発つ前に希望していた叶わなかったホームステイが今、形を変えて実現するのだ、と思った。

あとでベッドは作っておきます、といって玄関と寝室と台所のカギを渡されたが、カーシャは心得たもので、ちゃんと開閉できるかやってみ



て、という。実際カギはどれも摩滅して、いてなかなかうまくいかなかったが、部屋を断られやしないかと心配しながらカギを開閉してみせる女性は何ともいじらしかった。

私たちはタクシーを乗り継ぎながら、オリヴァの大聖堂でパイプオルガンの演奏を聞き、美術館を訪れ、ソポトの町では円い砂浜に長く突き出した遊歩道橋を歩き、バルト海の潮風に吹かれておしゃべりをした。

そのあとソポトの町にカーシャの友人をたずねた。その友人は突然行つたにもかかわらず、気持ちよくグダンスクを案内してくれた。私は、ワレサら連帯の仲間たちが立て籠もつた教会に案内してもらつた。夕方の礼拝が始まつていた。そのあと暗くなりかけた旧市内をゆつくり散歩し、その友人が設計したという旅行案内書にも出ているシーフードの専門店に案内された。地元の人でも「この前食べたのは十年前だったかな」という程高価だが、おいしいという魚を勧められた。八年前札幌でカーシャがお世話になつたお礼だ、とその友人は言つた。

十一時頃その友人に送られて帰つてきた。家の前に車をとめ、木戸を入ると、その友人はカーシャと自分のタバコに火をつけ、去りたいよ

うに車に寄りかかった。二人で何か低い声で話し合つてゐる様子には、映画のシーンのような素敵な雰囲気

が漂つてゐた。突然、棟続きの隣の家の二階の窓があいて、「うるさい。今何時だと思つてゐるんだ。とつとと帰れ」という声がとんできた。言葉はわからなかつたが、私にはそう聞こえた。

それを潮に私たちはサヨナラをいつて家に入った。家主の女性はカギを開け、階段の途中に立つて待つていてくれた。

私たちは疲れていて、翌朝目が覚めたのは十時半。身支度をして十一時にはその家を出た。家を出るときその女性はコートを着て玄関で待つてゐた。私たちのあとに入る次の客を駅に拾いに行くために。

私たちは聖エリザベス教会の中の見事な美術品のコレクションを見たあと、昼間の旧市街を散歩し、港のレストランで食事をした。その時カーシャは、昨日の友人は八年前に別れたボーイフレンドだ、と言つた。

(30号95年5月)

第2回

ポーランド訪問団に参加して

松井俊和

ワルシャワ、ウッチ、チェンストホーヴァ、クラクフ、グダンスクと、ポーランドを縦断した旅は、短い期間にもかかわらず、とても実り多い、そして印象深い旅になりました。今回の一番の目的であった、ウッチでのポーランドの人たちとの交流会は、両方の参加者によつて演ぜられたことが大歓迎されたのももちろんですが、ポーランドの人たちが、特に若い人たちが大勢来てくれたことが最もうれしいことでした。訪問団の一人の方が言われたように、「以前に比べて、ポーランドの人たちの表情が、すぐく明るくなつた。前には決して見られなかつた笑顔がたくさん見られるようになった」という言葉は、旅の間じゅう実感されました。ポーランドにとつて「社会主義の時代はなんだったんだろう」という問がなされるにせよ、その時代に「ポーランド人の表情が非常に堅かつた」にせよ、かい間見たポーランドの生活

は、あの時代であっても彼らは「ポーランド人」であり続けたに違ひなかつたことを確信させてくれました。そしてこれから、ポーランドはずっと素晴らしくなつてゆくのではないのでしょうか。その可能性が大きいことは、結局のところ、ポーランドの歴史の深さにあると思われまふ。

旅のひとつこまひとつこまが、それだけでも素晴らしかつたのは言うまでもありませんが、個人的に一番印象の強かつたのは、わがまを聞いてもらつて行くことのできたオシフイエンチムでした。人間の髪で作つた布、靴や眼鏡のやま、チクロンの缶、縞の囚人服を着た子供たちの写真、あるいは、コルベ神父の閉じこめられていた独房、銃殺の壁、そして、ガス室そのもの、それらが語るものは計り知れないでしょうが、しかし、ビルケナウの、夕方ではありましたが、ぬけるように高い空の下にはてしなく並び立っているかつて

のブラックの煙突の列は、いったいどう表現したら良いのでしょうか。焼いた灰を埋めたあとの池は、思っていた以上にずっと小さいものでした。きつと、すごく深いのだと……。あのようなことは、殺される人間のためになされるのではなく、きつと、生きていく人間が自分のためにやるのではないか、それゆえに、殺される側は「犠牲」と呼ばれるのではないか、と思ったりしました。

ポーランドの鷺鳥と犬

依田明倫

私は「お城」が好きなので、ヴァヴェル城やマルボルクのお城はとも「ファンタスティック」でした。ウツチの吉田先生には旅の間じゅうずっとお世話になりました。ありがとうございます。そして、旅の企画から何から何までやっていただいたスタッフの皆様、ありがとうございます。初めてのポーランド旅行のすばらしさは、皆様のおかげでした。

(38号97年11月)

今回北海道ポーランド文化協会主催のポーランドの旅に一員として参加させていただいた。団長の谷本会長、事務局の小笠原教授、東京から加わった栗原教授、それぞれ北方圏の権威者であり、研究室がそのまま移動し学ぶというような恵まれた十日間であった。まず、諸先生にお礼を申し上げ、更に事務局の小笠原先生、小林さんに勝手振る舞いの多い俳人を代表してお詫びを申し上げたい。

鷺鳥と犬

シヨパン生家。幾多の城塞、教会、

かつて市場都市として栄えたクラクフ、バルト海に面した商工業都市グダニスクを一見した。農村部ではどの家でも鷺鳥や犬を飼っていて、まことのどかそうであった。事実、朝の散歩やバスの窓から見たのであるが、鷺鳥が主婦のあとについてぞろぞろと歩き、彼女が立ち話をすると、首を上げて聞いていてここから忽ち童話や、ピアノの小品が生まれそうな感じであった。背景に馬鈴薯、小麦、更に玉葱、林檎、プルンの収穫の終えた大地がひろがってこそその世界である。

だが思った。鷺鳥や犬は塀や柵の

ない夜の家まわりに居て、鼠一匹通つても敏感に察し、ことに鷺鳥は他人の手なずけることの難しい家禽で「グワアグワア」と、見ず知らずの人に鳴き立て主人にすぐ知らせる。ここに動物との一体感の生活が現存し、ポーランドの歴史の一員としてこれからも受け継がれてゆくことであるうと思つた。

どの街でも堂々たる犬が飼われていた。シェパード、大型ワイヤテリア、プードル、銀行番や刑務所番になつたこともある、ドーベルマン、猟犬のセッター、ロシア貴族が狼狩りに使つたというボルゾイ、国中が犬の展示会のようなものである。ことにクラクフやワルシャワの公園では夕方には放してよいらしく、広大な敷地を自由に走り、それぞれの犬が本質的な姿で駆けているのが美しい。お互いの犬は嗅ぎよることがあつてもすぐ離れ、いがみ合うこともなく、主人の視線内に居るのがよく判つた。これらの犬は夜には家に入れられ居間に寝室の戸口で寝ると聞かされた。音に敏感であり、日々の運動で瞬発力のある大型犬が危険物に向かうときの姿を思うと、一見おとなしうに見えるが、犬自身の自負と誇りが目の前に迫る感じであつた。

犬も鷺鳥もポーランドの歴史ある

地下組織の守り主のような気がしてならず、次回には犬や鷺鳥の入手経路、日々の生活ぶりをじっくり観察し、そのうしろに家庭があり、村があり、街がある、その目に見えない連帯がポーランドを形づくっているのではないかという私の勝手な想像というか、直感の赴くままに原点をさぐりたいと思つた。

いづれにしろシヨパンを生み、キュリー夫人を生んだ国土の自由さと聡明さを少し垣間見させていただき感謝の一語である。

ポーランド国土のうねり茸生えダリヤ赤白存分に雪前を秋耕の国土歴史とどまらず楡落葉エヴァへ感謝の一曲と

以上 依田明倫

(38号97年11月)